
西暦3000年の昔話 その1

青木弘樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

西暦3000年の昔話 その1

【Nコード】

N5066J

【作者名】

青木弘樹

【あらすじ】

超・未来型の昔話です。

主人公は桃太郎。

さあ、いったいどんな冒険が待っているのか???

作：青木弘樹

むかし、むかしのことじゃった、。、。

西暦で言えば、2336年くらいかの。なに？めちゃくちや未来じゃと？何を言っとる。これを書いているのは西暦3000年じゃ。途方もなく過去じゃわい。

とにかくあるシティにおじいさんとおばあさんが住んどった。おじいさんは46歳。おばあさんは45歳じゃ。なに？若いじゃと？馬鹿を言え。年寄りじゃないか。ああ、。、お前さんたちの頃とは違つてな、地球環境は相当わるくなつてるので、平均寿命は50歳前後なんじゃよ。

まあとにかくおばあさんは川のほとりの全自動洗濯機に洗濯に、。なに？洗濯機は家に置け？まったくさつきからうるさいやつじゃの。誰がどうしようと勝手じゃるがまったく、。ええと、そしておじいさんはパジエロにチェーンソーを乗せて山へ芝刈りに行きました。

おばあさんが洗濯機の横でのんびりしていると、川下から大きな桃がどんぶらこ〜どんぶらこ〜、。、なに？川上からだろ？だと？まったく文明のレベルの低いやつは、。、この川は機械で制御されていて、川下から川上へも流せるようになってるんじゃまったく、。、黙って聞くんじゃ。とにかくでっかい桃が流れてきおった。おばあさんは電磁吸引機でそれを吸い取った。

しばらくして洗濯も終わり、おばあさんは乗ってきた軽トラックで家に帰っていった。それから二時間ほどして、おじいさんも帰ってきたよった。おじいさんは途中、コンビニでから揚げ弁当とハンバーグ弁当を買ってきたよった。

弁当を美味しくいただいた二人は、ちょっといちゃついたらあとの桃に目を向けた。

「こんな大きな桃は遺伝子操作しても作れまいて」

「そうですねえ。多分、桃の形をした簡易冷凍保存マシンじゃないですか」

「たぶんの。どれ、ばあさん、よく見てみよう」

おじいさんは桃を丹念に調べてみた。すると、小さな穴のようなものがあつた。

「見なされ、ばあさん。おそらくここがプラグ差込口じゃ。暗号マシンのプラグをここに差し込んで暗号を入力すれば、パカッと開くはずじゃ」

「パカッと？」

「そうじゃ。パカッとな」

「シャキーンではなく？」

「シャキーンではない」

「グワツでもなく？」

「音なんてどうでもいいじゃろうが、」

「それはそうですね、ほほほ」

早速おばあさんは暗号マシンをタンスから取り出し、持ってきた。

「よし、差し込むぞ」

おじいさんは暗号マシンのプラグを差込口に差し込んだ。

「中には何が入ってるんですかねえ。桃が入ってたら面白いんだけど」

わくわくするおばあさん。

「ばあさんや、暗号がまだわからんぞ。暗号を解読せんとな」

「暗号なんぞ、その改造した、もとい違法改造したマシンなら五分もあればハックできますよ」

「さすが、ばあさん。元、エンジニアの犯罪者め」

「ほほほほ」

二人は笑顔だった。ちなみにおじいさんは元、プログラマー。ゲ

ームなんかも作ったことがある。

そしておばあさんの言葉通り、4分44秒でハッキング完了。25桁の暗証番号が暗号マシンに表示された。

「よしよし。ふむ、、、25桁か。意外と短いの」

「そうですねえ。うちの家の鍵の暗証番号は55桁なのにねえ」

「これは中身は期待できそうもないの」

「脱税したお金とかではないようですね」

おじいさんはさっそく暗証番号を打ち込んだ。

”ピー、バンゴウ、シヨウニン”

そしてついに桃が開いた。

”プシュー”

「おじいさん、パカッじゃなくプシューじゃないですか」

「だから音はどうでもいいじゃろ、、、」

それはやはり冷凍保存マシンだった。そして中に入っていたのは桃色の卵。大きさはサッカーボールくらい。

「こ、これは、、、」

おじいさんは驚いていた。

「どうしたんですか？おじいさん」

「これは、昔、拾った本に書いてあった桃太郎の卵では？」

「桃太郎の卵？」

「ああ、、、ああ、間違いないわい。これは桃太郎の卵じゃ！」

おじいさんは驚愕していた。

「桃太郎ねえ、、、」

おばあさんは驚いていなかった。というか中身が食べ物やお金でなくてがっかりした。

「これはすごいぞ、、、本にはこう書いてあった。これを70度の塩水で一時間あたためると、中からプチ桃太郎が出てきます。プチ桃太郎は産みの親に必ずや幸運をもたらすでしょう、とな」

「、、、」

「どうした、ばあさん？」

「産みの親って、、卵を産んだのは私たちではないでしょう？」

「そんな細かいことはどうでもええんじや。卵から孵化させたら、それが産みの親じや！」

おじいさんは少し必死だった。

「そんなもんですかねえ、、」

「そんなもんじゃ！さあ、さっそくあたためるのじや！」

おじいさんはIHのクッキングヒーターの上に大きな鍋を置き、塩水を入れ、卵を温め始めた。

「よおし」

そんな必死なおじいさんをよそに、おばあさんは缶コーヒーのBOS S微糖を飲んでいた。そしてテレビを見ていた。番組はアタック25。なんとこの番組、まだ終わっていないかった。司会者はアメリカ人だが、『アタックチャ〜ンス！』の発音がすばらしい。アメリカ人だからね。

「おじいさん、コーヒーでもどうですか？」

「いや、いらんよ。とにかく孵化させないと、、」

「、、、、」

そして、一時間近く過ぎた頃、

”ピシッ”

卵にひびが入った。

「おお！」

おじいさんは鍋から卵を取り出し、しいてあったタオルの上に置いた。

「ばあさんや！きてみい！ついに産まれるぞ！」

「、、、、」

おばあさんは卵のほうに行ってみた。しかしそんなに興味はなかった。

”ピシピシ、、、、”

卵はひびだらけになり、今にも何かが出てきそうだった。

「ほれ！がんばれ！」

おじいさんは必死だった。そして、
”パリン！”

卵は勢いよく割れ、何かが飛び出した。飛び出した物体はおじい
さんとおばあさんの後ろに転げ落ちた。

「！」

二人はその物体を見た。それはピンク色の人の赤ちゃんのような
生き物だった。

「おお！」

おじいさんはゆっくり近づいた。そして手を伸ばしたとき、

”バキッ！”

その生き物は立ち上がり、おじいさんにパンチを食らわした。

「あべし！」

おじいさんはのけぞった。

「熱いじゃねえか！」

その生き物は怒っているようだった。

「、、、」

おばあさんは呆然と見ていた。

「まったく、、、このくそじじい」

「、、、」

おじいさんは黙ってプチ桃太郎（推定）を見ていた。

「おいじじい、なに見てんだよ」

プチ桃太郎はガラが悪かった。

「やっと出てこれたぜ。まあとりあえず出られたから、許してやる

よじいさん

「、、、」

「けど腹減ったな、、、おいばあさん、何か食わせろや」

「え？」

「飯だよ飯、なんでもいいからさ」

「あ、ああ、、、」

おばあさんは一瞬迷ったが、ちょっと恐かったので、飯を作るこ

とにした。

おばあさんはおにぎり三個と、目玉焼き、ロールキャベツを作った。

「おう、サンキュ。ロールキャベツたあ、なかなかいかすねえ。いただきますーす」

プチ桃太郎は、それらを美味しくいただいた。

「あ、あのちよつといいかな、、、？」

おじいさんが、恐る恐る聞いた。

「お前はプチ桃太郎なのか？」

「ん？ああそうだよ。俺さまはかわいいかわいいプチ桃太郎さ」

「そ、そうか、、、。とりあえず何て呼べばいい？」

「ん？なんでもいいけど、プッチでいいんじゃないか？」

「プッチか、、、」

「呼びにくいか？」

「いやそんなことはないが、、、」

「ふう、食った食った」

プッチ（プチ桃太郎）はご飯を食べ終わった。非常に満足そうだった。

「さてと、、、ちよつと寝るからよ、2〜3時間したら起こしてくれや。じゃあな」

プッチは寝てしまった。

「、、、」

おじいさんは少し不安げだった。

「どうしたんですか？おじいさん」

「いや、、、」

「おじいさんはそう言うつと、何も言わず外の物置へと向かった。？」

おばあさんは不思議そうな顔をしていたが、そのまま座ってプチ桃太郎を見ていた。しばらくしておじいさんが帰ってきた。手に何か持っている。

「おじいさん、それは？」

「これはさつき話した本じゃよ」

「ああ、、、」

おじいさんは本をしばらく見ていた。そして、

「あっ！」

おじいさんは何かを発見したようだった。

「ど、どうしたんですか？」

「しまった！わしは間違えとった。塩水で温めるのではなく、砂糖水だった！」

「そうなんですか？」

「くく、そのせいかの、、、こんなにガラの悪いプチ桃太郎が出てきたのは、、、」

おじいさんは悔しそうだった。

「まあまあいいじゃありませんか。ほら見てごらんなさい。寝顔はこんなにかわいいですよ」

プッチはスヤスヤ眠っていた。その寝顔は確かにかわいらしかった。

「、、、」

しかしおじいさんの不安は消えることはなかった。

「本当に、、、こいつが幸せをわしらに与えてくれるんじやろうか、
「、、、」

「どうでしょうかねえ。けど、、、」

「なんじゃ？」

「ほら、、、私たちは子供に恵まれなかったでしょ？だから、、、
私はちよっと今うれしいですよ」

「ばあさん、、、」

約三時間後。おばあさんはプッチを起こした。

「プッチや、起きなさい」

「う、ううん、、、」

「、、、」

おじいさんは警戒していた。起きたとたん殴られるのではないかとドキドキしていた。

「プッチャ」

おばあさんは笑顔だった。

「ん、、、ああ、、、おはよう、おふたりさん」

「プッチャ、よく眠れたかい？」

「まあね、、、ふわああ、、、」

プッチは大きなあくびをした。

「ふふふ、、、」

おばあさんは優しい目をしていた。

「さてと、、、」

プッチは起き上がり、深呼吸をした。

「あらためまして、おふたりさん。プチ桃太郎のプッチだ。今日から世話になるから、そこんとこ、よろしく!」

「、、、」

おじいさんは不安げな目で見ていた。そして勇気を持って話しかけてみた。

「なあプッチャ、お前さんは産みの親を幸せにする力があるんじゃない?」

「ん?じいさん、よく知ってたな。まあ正確には育ての親だけだな」

「じゃ、じゃあお前はわしらを幸せにしてくれるのかい?」

「ああ。もちろんだ。そうプログラムされている」

「プログラム?」

「お前さん、ロボットなのかい?」

おばあさんが聞いた。

「ロボットじゃないよ。俺自身もはつきりは知らないけど、バイオテクノロジーで作られた生き物らしい。寿命は三年だ。まあ、ちゃんと世話してくれなかったら、例えばまったく何も食べなかったら、人間と同じように餓死するけどな」

「三年、、、」

おばあさんがつぶやいた。

「け、けど、どうやってわしらを幸せにしてくれるんじゃない？」

おじいさんが聞いた。

「へへへ、それは今は言えない。とりあえず一年、俺を世話してくれ。一年であんたら人間の17歳くらいの大きさになる。そしたら全部教えるよ」

「、、、、」

おじいさんは半信半疑だった。

「あゝ、じいさん、なんか疑ってるな？」

「いや、そうじゃないが、、、、」

「まあまあいいじゃないですか、おじいさん。育ててみましょうよ、ね」

「わ、分かった。だが約束は守れよ」

「まかすとけてー！」

「ふふふ」

おばあさんは本当にうれしそうだった。

こうしておじいさんとおばあさんは、今日から一年、プチ桃太郎、通称プッチを育てることとなった。

果たしてプッチは一年後、どんな幸せをふたりに与えるというのだろうか、、、、？

その2へ続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5066j/>

西暦3000年の昔話 その1

2010年10月8日13時07分発行